慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学
Sub Title	Studies on the History of Sociology in Modern Japan and Magoichi Nunokawa's Sociology
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1993
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.66, No.3 (1993. 3) ,p.1- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19930328-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学

川合隆男

一、はじめに
二、一九〇〇年前後の「社会学会」「社会学研究会」における布川孫市、高木正義らの活躍
三、布川孫市の社会学とその変転
四、近代日本社会学史の批判的継承

一、はじめに

われわれが、自らかかわり続けようとする学問の足跡を再考することの意義はどこにあるのであろうか。人間関係の構造とその歴史的変動、広くは自然と人間、人間と人間、人間と社会・文化等の関係構造とその変動に学問的関心を寄せる社会学徒にとって、社会学史研究、ここでは特に日本社会学史研究の必要性は何であろうか。

さまざまな関係を通じて繰り広げられる人々の生活が営まれる（歴史的）「現実」を学問的に解明していく作業を「学問運動」であるとすれば、「現実」や「学問運動」のいずれか一方にのみ、ひたすら埋没してしまうことなく、両者の相互の媒介過程においてその学問運動のさまざまな試みを適切に継承し、批判的に再検討し、更に創造的に歴史

的展開を図ろうとすることは、社会学徒にとってもまた重要な課題といえる。近代日本における現実と学問運動、経験と思想、継承と創造との相互に媒介的な連関作業の足跡をあらためて問い直してみることが必要であると考える。近代日本社会学史研究においてもこれまでこうした試みはなされてきたが、いまだ十分に究明されてきたとはいえないのではなかろうか。

社会学史の研究を進めていくうえで、一般的には次のような論点およびアプローチを設定することが可能である。

(i)社会思想ないし社会学思想、社会学説、社会学上の理論的パースペクティブ（あるいはパラダイム、モデル）を基本的な論点として社会学史研究を進めようとする試み。[1]

(ii)人々の生活、社会問題、社会観察・社会調査、社会学理論、政策的課題等の相互の関連に主な焦点をあてて社会学史を考察しようとするもの。

(iii)家族、農村・都市（地域社会）、宗教、労働・職業・産業、政治、階級・階層、社会意識、マス・コミュニケーション、男性と女性、環境、社会問題、社会福祉などの社会学の個別専門領域、あるいは専門分化過程を対象にして社会学史を構成しようとするもの。

(iv)学会や研究組織の活動などのように、社会学を中心とした学問運動・活動の組織化および制度化（非制度化）(institutionalization, deinstitutionalization, reinstitutionalization)、主にわが国において学会や研究組織がどのような人々によってどのように組織化され、更に学問活動がどのように制度化されていったのか、そうした組織化や制度化が人々や集団によるさまざまな学問運動・活動をどのように促進し、あるいは制約していったのか。

(v)社会学の学問運動・活動を担った人々の特徴や足跡、社会学的生涯、生活史との関連に重点をおきつつ社会学史の展開を跡づけようとするもの。[2]

これらの(i)〜(v)を相互に関連づけて学史研究することは当然可能であるし、そのような接近が望まれる。しかし、

従来の近代日本社会学史研究においては多くは(i)社会学思想、社会学説、社会学理論を中心としており、(ii)～(v)の論点、アプローチは相対して軽視されてきたといわざるを得ない。後に触れるようにわが国の明治期の「社会学会」「社会学研究会」、大正期の「日本社会学院」、大正末期の設立から今日の「日本社会学会」に連らなる学会活動についての学史的研究も極めて不十分なものであったと考える。次ぎ次ぎと新たな社会学上の潮流や動向（さまざまの社会学思想・社会学説・社会学理論など）が研究され論議される旺盛さ、賑やかさや激しさに驚く一方で、それらが着実に研究成果となって蓄積されつつも、共有の知的財産（遺産）や資源となって活用・創造されることの難しさをも思わざるを得ない。

ここでは、近代日本社会学史研究の動きに照らして、これまで相対して試みられることの少なかった(v)学問運動・活動を担った人々の足跡、生活史や(vi)学問運動・活動の組織化、制度化という論点やアプローチに焦点をあてて考察していきたい。特に学問運動・活動を担った人々の足跡に焦点をあてて、明治期社会学界の組織化の動きとその中心となった布川孫市（一八七〇―一九四四）（明治三―昭和一九年）の社会学上の足跡をわたし自らの不明や不勉強を反省しつつ少しでも明らかにしてみたい。以下、㈠一九〇〇年前後の「社会学会」「社会学研究会」における布川孫市、高木正義らの活動、㈡布川孫市の社会学とその変転、の順に論を進めていきたい。[3]

二、一九〇〇年前後の「社会学会」「社会学研究会」における布川孫市、高木正義らの活躍

学問運動・活動化の組織化および制度化の動きは、自然科学分野や社会科学分野等の学問分野を問わず広くかかわる動きであるが、ここでは近代日本における社会学を中心とした学問運動に関する動きである。その組織化および制

度化とは、(i)人々の「現実」に対する直接・間接の学問関心を媒介にして、(ii)一定の人的ネットワーク、コミュニケーション・ネットワーク、集団・組織等を作り、(iii)成員相互の、そして広く社会のなかで交流を図りながら、社会学などの学術的・専門的な学問活動が、研究会、学会、大学、その他の集団や機関・団体等の結成設立を通じて（組織化）、(iv)一定の資金源・人的資源、情報（交換）活動、定期的な会合運営や機関誌等の刊行などを活用して、(v)それらの活動がある程度恒常的に、規則的・規範的に、正統的に継続され、人々の間で広く承認されながら展開されていく過程（制度化）である。従って、組織化（organization）と制度化（institutionalization）とは明らかに区別される過程であり、学問運動・活動の組織化がそのまま制度化されていくとはかぎらないし、制度化されていったとしてもそのなかにいくつもの集団組織を含み、あるいは新たな組織化、対立抗争、制度化の硬直化や非制度化などの動きをも胚胎しているといえる。

学問運動・活動の組織化および制度化という側面に焦点をあててみると、わが国の社会学界の動きは、大きく三つの時期に分けることができる。第一の時期は一九〇〇年前後にかけての布川孫市（静淵）、高木正義、加藤弘之などを中心とした「社会学会」（一八九六―一八九八年）（明治二九―三一年）、「社会学研究会」（一八九八―一九〇三年）（明治三一―三六年）の動き[4]、第二の時期は一九一三（大正二）年に建部遯吾、米田庄太郎を中心に設立され一九一〇年から一九二〇年初めにかけての「日本社会学院」という組織化の動き、そして第三の時期は下出隼吉、藤原勘治、林恵海、今井時郎、戸田貞三などの斡施によって一九二四（大正十三）年に創立され、今日の「日本社会学会」に直接に連らなっている「日本社会学会」という組織化と制度化の動き[5]である。

第一の時期には「社会学会」が機関誌として『社会雑誌』（第一巻第一号―第一五号、一八九七（明治三〇）年四月―一八九八（明治三一）年八月）を刊行、「社会学研究会」は『社会』（第一巻第一号―第三巻第十二号、一八九九（明治三二）年一月―一九〇一（明治三四）年十二月）、更に『社会学雑誌』（『社会』の改題追号として第四巻第一号―第五巻第三号、一九〇二

（明治三五）年二月―一九〇三（明治三六）年四月）を継続刊行していた。第二の時期の「日本社会学院」は、機関誌『日本社会学院年報』（第一年―第一〇年、一九一四（大正三）年―一九二三（大正十二）年）、そして『社会学研究』（第一巻第一号―第四号、一九二五（大正一四）年四月―一九二六（大正一五）年八月）を刊行している。[6] 第三の時期にあたる「日本社会学会」においては機関誌刊行をめぐるいくつもの曲折を経て今日に至っている。まず『社会学雑誌』（第一号―第七七号、一九二四（大正十三）年五月―一九三〇（昭和五）年九月）、『季刊社会学』（第一輯―第四輯、一九三一（昭和六）年四月―一九三二（昭和七）年七月）、『年報社会学』（第一輯―第九輯、一九三三（昭和八）年―一九四三（昭和一八）年）、『社会学研究』（年報）（第一輯、一九四四（昭和一九）年六月）、『社会学研究』（第一巻第一輯―第二巻第一輯、一九四七（昭和二二）年四月―一九四八（昭和二三）年十二月）、そして『社会学評論』の創刊（一九五〇（昭和二五）年―現在）と続いている。われわれは、これらの機関雑誌等をひとつの基本資料として当時の学会活動・学問活動の特徴を再考察することが可能である。

ここでは第一の時期の「社会学会」「社会学研究会」の組織化の動きに限定して、それらの結成の動きや特徴を明らかにすることから始めたい。一八九七（明治三〇）年四月に創刊された「社会学会」の機関雑誌『社会雑誌』の「思潮」欄に、「……昨年十一月「社会学会」を発企して毎年四回雑誌刊行の計画は、遂に毎月一回として今日初号を刊行する運に達せり」[7] とあるところから、「社会学会」の結成は前年の一八九六（明治二九）年十一月であった。また「社会学会々員諸君に告ぐ」という欄には当初は『社会学雑誌』という誌名で年四回の刊行を予定していたのを毎月一回『社会雑誌』に改めたとある。同じ創刊初号の巻末奥付のページには次のような「社会学会設立趣旨大要」を載せている。

夫れ社会学は社会的諸学科の基く所にして人間の歴史的発達一般社会の進化開展の理法を究め親しく実際社会の生活を調査し将来社会改良の方針を示すものなり見よ欧米諸国の時論は社会学に集注し今日の学理界は社会問題の時代なりと称せらる而して

今や我国貧富漸く懸隔し来りて貧民問題起り地主と小作人との関係穏かならずして土地問題起り資本家と労働者と相衝突して労働問題起らんとする現象少ならず是れ豈に由々しき一大事に非ずや此時に当り一方には社会学の原理を究め他方には実際社会の生活を調査し之を未発に予防し之を既発に調整するの要ある弁を俟たずして明かなり社会政策としては社会主義の成来より社会党の運動等を察し慈善事業としては孤児院救助院等の発達を尋ね犯罪の救治監獄の改良より民俗気風宗教の如き社会心理的現象を視察し以て社会学上より之を攻究し之を論議せざるべからず吾人は深く時勢に感ずる所あり玆に社会学会を設立し科学的見地を以て諸般の社会学的問題を議せんと欲す仰ぎ願くは江湖有識の士吾人の微志を賛同し相共に協力補助せられんことを

其規則摘要（四月改正）

一、本会は社会学の原理、社会主義、社会問題等を攻究するを以て目的とす。

一、本会の目的を貫徹する為め、毎月一回集会を開き種々の問題を懇談し又臨時講談を公開すべし。

一、本会々員は毎月十五銭、（年一円八十銭）を会費として収むべし。

一、本会の趣旨を賛成し、半ヶ年金二円、一ヶ年金四円を収むるものを維持員とす。

一、事務所は東京市麹町区下六番町六番地に置く。

四月　社会学会事務所

この社会学会事務所の所在地は、「社会学会」の設立の中心であった布川孫市（静淵）が、当時編集に深くかかわっていた『女学雑誌』社、『日本宗教』社の所在地と全く同一であった。この当時、布川が同時に『日本宗教』、『社会雑誌』、『女学雑誌』の編集等にかかわっていたと思われる。また、この「社会学会」の設立にはどのような人々がかかわっていったのであろうか。布川がこの当時編集主幹であった『日本宗教』第七号（明治三〇年一月）に「社会学会報告（第一回）」の小記事が次のように掲載されていた。(8)

一、左記の諸氏は、本会の趣旨を賛同して論文を寄送し若くは材料を供給して相応の補助せらるゝを約せらる、依て特別賛助員とす（いろは順）

巌本善治君　戸川安宅君　本多庸一君　横井時雄君　横山雅男君　田口卯吉君　津田　仙君　大西　祝君　加藤弘之君

片山　潜君　呉　文聡君　三宅雄次郎君　島田三郎君　元良勇次郎君　元田作之進君

一、左記の諸氏は、本会の維持会員として入会せらるる

巌本善治君　贄田剛橘君　女学雑誌社　戸川安宅君　岩野美衛君　藤井米八郎君

一、地方入会者左の如し（姓名順序不定）

在北海道　林竹太郎君　近江　勝島幸甚君　羽前　斎藤恵治君　三河　林　英泉君　信濃　西沢茂作君　常陸　光栄能躰君

甲斐　依田豊蔵君　仙台　川合信水君　八王子　高城牛五郎君　京都　杉村広太郎君　能登　管　英麿君　近江　中川幽流君

一、在京入会者左の如し

平田直江君　生江孝之君　小島台明君　木下竹次君　河本亀之助君　飯塚陽平君　井口基二君　蓮沼磐雄君　大藤鋳三郎君

小此木信一郎君　加藤熊一郎君　竹内楠三君　佐村徳介君　（以下次号）

これらは「社会学会」設立当初の会員名であるが、『社会雑誌』に執筆したりして関係した主な人々は、布川孫市、加藤弘之、呉文聡、高野房太郎、佐久間貞一、巌本善治、島田三郎、片山潜、松村介石、田島錦治、高木正義、小河滋次郎、原胤昭、横山雅男、石川惟安などであった。高木正義が米国・欧州諸国の留学より帰国したのは一八九七（明治三〇）年七月であり、彼が「社会学会」『社会雑誌』に関係し始めるのは明治三一年初めからであった。布川孫市は丁度この当時キリスト教系の学校、明治女学校の教師として社会学を講じ始めた時期であり、わが国において社会学に直接かかわる学会組織・研究会組織として初めて組織されたこの明治二九年十一月設立の「社会学会」は、布川孫市（静淵）の明治女学校、『女学雑誌』、『日本宗教』、東京英和学校（青山学院）などに連らなる人脈を活用して発足され主宰された学会であったといえる。当時の『哲学雑誌』にはこの「社会学会」について、「日本宗教社の布川孫一氏は此の度加藤、三宅、田口等諸氏の賛助を得て社会学会を同社内に設立し、一方に社会学の原理を究め他方には実際社会の生活を調査し、殊に貧民問題、労働問題、等に就きて研尋を施すと謂ふ」と記されていた（『哲学雑誌』第十一巻百十八号、明治二九年十二月、一〇二七頁）。

「社会学会」第一回の会合（研究月例会）は、明治三〇年四月二四日に神田青年会館で開かれ、田中正造氏の鉱毒問題、更に片山潜氏、原胤昭氏の談話を予定して進められたが、途中『社会雑誌』（初号）で触れた「社会問題研究会」「協同親和会」に関する記事をめぐって突如来訪面会者との紛擾があったりで、当時の社会問題の状況を強く反映した波乱の多い出発であった。また『社会雑誌』（初号）にも「本号は四月五日発行の所、本誌主筆氏、足尾銅山鉱毒被毒地視察の為め、前後五日に亘りて旅行し、為めに印刷所の手順後れ、延引せり、次号よりは毎月十五日に発行すべし」[9]とあるように、雑誌刊行も危げながらもどうにか発刊されていった。

「社会学会」の『社会雑誌』、「社会学研究会」の『社会』『社会学雑誌』の発足、発刊を促した背景は、近代日本の新たな社会的激変とそれにともなう社会問題の出現にあったが[10]、月例会をもつこの「社会学会」はキリスト教系の主として民間の社会事業・社会改良・社会運動者、学者、教育者、政治家、実業家等の賛同・参加を得て、加藤弘之、元良勇次郎、高木正義、呉文聡などのように官立大学や官庁の学者、統計家、片山潜や高野房太郎などのように労働問題、社会運動に強い関心をもつ人々をも含めた、いくつかの思想傾向を内包した学問運動・活動集団であった。『社会雑誌』は全部で十五号まで約一年半の間刊行されたが（明治三〇年四月―同三一年八月）、「社会学会」は学会組織といえるものは殆んどない、多分に布川孫市個人を核とした賛同参加者の熱い情熱や強い学問関心に支えられた学問運動の試みであったといえる。それだけに「社会学会」はあまりにも短命であったが、わが国社会学における学問運動・活動の組織化の第一歩が刻み込まれたのである。

「社会学会」の後に結成されたのが、加藤弘之、元良勇次郎、富尾木知佳、岡百世、武井悌四郎の発起（明治三一年六月）によって、加藤弘之を会長とした「社会学研究会」（一八九八（明治三一）年十一月発会設立）であった[11]。このときの発会式で、会長加藤弘之[12]、評議員は元良勇次郎、有賀長雄、小河滋次郎、戸水寛人、呉文聡、高木正義であり、委員は武井悌四郎、岡百世、富尾木知佳、布川孫市、十時弥、高桑駒吉、五来欣造という役員が決定された。また、当

初の庶務主任は岡百世、雑誌『社会』の編輯主任は武井悌四郎であった。「社会問題の勃興、社会学研究の盛運は識者の既に認むる所、この問題を解釈し、此の研究を促進せんことを期して起れる社会学研究会は、昨年十一月十二日其の発会式を兼ね大会を富士見軒に開けり。来会者無慮七十余名……」[13]と発会式の様子が掲載されている。「社会学研究会」の会則は以下のようなものであった。[14]

会則

第一条　本会の名称を社会学研究会とす

第二条　本会の目的は社会学の原理、社会問題及び社会改善策を研究するものなり

第三条　研究の方法

第一　談話会（時々開会す）

第二　研究会（討論）（同前）

第三　講演（毎月一回）

第四　雑誌発行（同前）

第四条　会員は左の者より成る

第一　帝国大学々生并に之に関係ある者

第二　本会の目的を助成のる者　但し入会は会員の紹目に由り役員の決議を経るものとす

第五条　役員を定むること左の如し

会長　一名

評議員　七名

委員　七名（内二名は大学々生より四名は大学以外より選出す）

但し評議員及び委員は会員の投票により会長の承認を得たる者

第六条　会長は本会を監督し、評議員は本会の要務に参与し、委員は会務に処理す。但し委員の任期は一ヶ年とす。

第七条　会費として会員は毎月金十銭を納む可し

第八条　毎年一回秋季に大会を開く

第九条　規則修正は会員の提出に由り評議員会の決議を経るものとす

明治三一年六月

発起人

加藤弘之　元良勇次郎

高木正義　富尾木知佳

岡　百世　武井悌四郎

因みに『社会』（第一号）に記載されている入会者名簿によると、一九三名の人々の名前があり、この時点での入会者のリストのなかには、他に、井上哲次郎、外山正一、（法科大学生）河津暹、（独逸遊学中）建部遯吾、（法科大学生）松岡国男、松島剛、岸本能武太、島田三郎、遠藤隆吉、原胤昭、小河滋次郎、（法科大学生）小野信一郎、片山潜、坪井正五郎、津田真道、（法科大学生）松本烝治、（文科大学生）樋口秀雄などの名前がある。この入会者のリストに関して先の「社会学会」との繋がりをみると、巌本善治や本多庸一、田口卯吉、大西祝などの名前はないが、布川孫市をはじめ、加藤弘之、片山潜、呉文聡、島田三郎、元良勇次郎、高木正義、小河滋次郎などの有力なメンバーは引き続いて「社会学研究会」にも参画し重要な役割を担っていったのである。特に高木正義、そして布川孫市も再び「社会学研究会」においても、『社会』『社会学雑誌』の編集においても中心的な活躍を果していくのである。

翌明治三二年十一月末に催された社会学研究会総会に出席した人々の写真が『社会』（第一〇号）に収録されていて興味深い。[15] 更に社会学研究会発会一年後の会員について次のような概況報告がなされている（『社会』第一〇号、八九―九〇頁）。

一、会員

現在数　二四八名。退会者数　二名。

在京会員　一九六名。在地方会員　五二名。

一、会員の職業別左の如し

学生　一二二名　法科大学生八〇名
　　文科大学生二〇名
　　他諸学校生徒二一名

教育家　五九名
官吏　七名
監獄官吏一二名
農　一八名
商　一〇名
新聞記者　五名
社会事業従業者六名
実業、銀行員五名
弁護士　二名
政党員　二名

布川孫市の主宰による「社会学会」の『社会雑誌』の刊行が続けられたのはその第一五号の出た一八九八（明治三一）年八月まであったから、この東京帝国大学法科文科の有志を中心とした「社会学研究会」の発起自体はその刊行継続中の同年六月に試みられていたことになる。「社会学会」が「社会学研究会」に発展的に解消していったともみれないことはないが、キリスト教に関心をもつ者を軸に民間の幅広い学問運動への参画から東京帝大系の研究者、学生を中心にした研究会組織へと新たに再編されていったともいえる。そして今や雑誌発行の目的にみる学問運動の特徴も、『社会雑誌』の「『社会雑誌』は人間の歴史的発達一般社会の進化開展の理法を究め親しく実際社会の生活を調

査し社会改良の方針を示さんこと期す」、「『社会雑誌』は社会学、社会主義、社会問題等に関する諸般の事件を論議する専門雑誌なり」とする社会改良運動、社会運動や社会問題とのかかわりを深めた社会学の学問運動から、「社会学研究会」・『社会』の「本会の目的は社会学の原理、社会問題及び社会改造策を研究するものなり」として、むしろ社会主義的な社会運動の動きとは次第に分化し学問講究を中心とした社会学の学問運動へと純化の傾向を強めていったといえる。しかし、社会問題に関する関心は根強く持続されていた。

『社会』発刊後に、早々に編集主任となり編集主任を二年半余つとめた布川孫市は、第三巻十二号（明治三四年十二月）で「本誌『社会』の将来」という告示に翌年一月より『社会学雑誌』に改題される旨を記している。布川は、この間に曲折もあったようで、編集主任を辞退して「告別の辞」をも予定していたようであったが、『社会学雑誌』においても布川が編集主任にあたった。改題された『社会学雑誌』（『社会』を追号して第四巻一号、明治三五年二月）は、表紙に「社会学社会問題及社会政策上の評論」を副題に冠して、そして The Journal of Sociology という英文名をも表記して再出発したが、実際にはあまり長く続かず第五巻三号（明治三六年四月）で終刊してしまった。

この『社会学雑誌』の特徴は、表紙の副題に社会学、社会問題、社会政策上の評論とあるように、『社会雑誌』『社会』で多少とも継続されていた社会主義運動や社会改良運動への関心はますます変容して後退させていった面がうかがえる。高木正義は「社会学研究会の本領」を『社会学雑誌』（第四巻一号）に書き、「社会学研究会」は「純然たる学理研究を主となさんとする者なり」、「吾人は社会学、社会問題及社会政策を研究せんと欲する者なり、各自研究したる結果に於て意見の衝突、学説の相違あるは勢ひの然らしむる所と云ふべし。之れ予め吾人の期する所なり」として続刊されたのであった。しかし、「社会学研究会」は一八九八（明治三一）年十一月の発会より『社会学雑誌』の終刊（明治三六年四月）までの間、約四年半程その活動が継続されたが、その幕を閉じるのである。「社会学会」、「社会学研究会」も、日清・日露戦争の戦間期の激変期の学問運動をともに担い、組織化が試みられたが、やはり比較的に短い

活動であったといえよう。「社会学研究会」の方が東京帝大を軸に会則や入会状況等などに明らかなように、より一層組織化が図られたが、学問活動をさらに継続的に支えていくだけの学会組織の学問・思想的基盤、人的・財政的基盤、組織的基盤も依然弱く、学会組織をとりまく環境も内外ともに急速に変化しつつあった。東京帝国大学での社会学講座はこの当時高木正義と建部遯吾両講師が分担し、特に明治三四年七月までは高木講師が社会学講座の事実上の担当者であったが、建部遯吾が同三四年十月に欧州留学より帰国して直ちに教授に任ぜられ社会学講座の担任となる。建部はこの時期の「社会学会」「社会学研究会」の活動には殆んどかかわることなく、明治三六年三月に東京帝大に「社会学研究室」を開設し、「建部時代」の社会学を担っていくことになり[16]、やがて、一九一三(大正二)年に新たな学会組織「日本社会学院」を創設していった。高木正義は大学を去り実業界に入っていく[17]。

学問運動・活動の組織化および制度化の第一の時期にあたる「社会学会」(一八九六―一八九八年)は機関雑誌『社会雑誌』、これに続く「社会学研究会」(一八九八―一九〇三年)は『社会』、その続刊として『社会学雑誌』を発刊したが、これらの機関雑誌を通じて草創期の学問運動としての社会学の特徴を再考察すると次のような諸点をあげることができる。(1)当時の社会問題、社会運動、社会政策活動への強い関心、(2)当時のキリスト教徒系の人々による社会事業・社会改良運動や労働運動・社会主義運動の動き、更に学問運動としての社会学の相互の密接な関係がかなり強かったこと――近代日本社会学の第一の時期における組織化および制度化の動きにおいて特にキリスト教徒系の人々の活躍に著しいものがあり、これら三者の動きが当初から分極対立していたというよりも、日本の現実の社会問題、社会運動との対応過程で次第に分極対立化していく動きを読みとれる。学問運動としての社会学が学理研究に専念していこうとする傾向を強めながら、帝国主義、国家主義の轍を迷い求めてそこへ踏み入ろうとする前夜の状況がそこにあったと考えられる――、(3)当時の社会学がもつ他の諸学問分野との幅広い交流や関連、「実地探究」や「社会観察」の試み、(4)当時の社会学の思想的・学説的な複合・競合状況――スペンサー社会学や自由民権運動から一足飛びに建部

社会学や明治社会主義に移行していくのではなく、戦間期のこの期では社会有機体説と心理学的社会学・社会心理学、コント、スペンサー社会学とスモールやヴィンセント、シャフレ、グンプロヴィッツ、ラッツンホーハーの社会学等がすでに渦巻き、理論的社会学と実際社会の観察・調査とがむしろ相並び競合し交錯するような草創期の学問運動が「社会学会」「社会学研究会」を舞台に繰り広げられていたのである。タード（タルド）、ドェルクハイム（デュルケム）、ギジィングス（ギディングス）なども紹介されている――、(5)この時期における布川孫市（静淵）、高木正義、加藤弘之などの活躍と社会学上の足跡、などを挙げることができる。

近代日本社会学史研究の基本的な視点からいえば、この期を相前後する東京帝大の社会学研究室を中心とした建部社会学の体系化に焦点を合せ過ぎ、他の動きや系譜を見えにくくし眩惑されてきたともいえる。

三、布川孫市の社会学とその変転

草創期の学問運動がどのような人々によって担われていったのか、それらの人々が何故に社会学という学問にかかわり、学問的営みを持続していったのか、あるいは持続していかなかったのか、という人間的営為としての社会学的生涯（sociological life）、個人社会学と社会学上の道連れ（sociological convoy）にかかわる課題を設定できる。

(a) 布川孫市（静淵）の近代日本社会学史上の足跡

布川孫市（一八七〇―一九四四年）は、高木正義（一八六三―不明）、加藤弘之（一八三六―一九一九年）などとともに「社会学会」（雑誌『社会雑誌』）、「社会学研究会」（『社会』『社会学雑誌』）において中心的に活躍した人物である。一八九九（明治三二）年十一月の「社会学研究会」総会の際の記念写真のなかに、加藤弘之、小河滋次郎、呉文聡、島田三郎、

金井延、元良勇次郎、留岡幸助、片山潜、松島剛、高木三郎、岸本能武太、桑田熊蔵らとともに、布川孫市、高木正義の顔がみえる。[18] 布川は当時これらの活動に参画し「明治女学校」（明治一八年に木村熊二・田口卯吉・植村正久・島田三郎・巌本善治の発起により設立されたが、明治四二年頃休校・廃校）[19]において社会学を講じていた。布川孫市については彼自らの「三十年前後の社会学界、社会運動界に関する追懐談」（日本社会学会『社会学雑誌』五三号、昭和三年）等によって彼の存在が知られてはきたが、布川の社会学上の足跡は殆んど知られておらず、研究をも欠いてきた。

布川孫市の社会学上の足跡に関する研究がこれまで何故なされずにきたのであろうか。ここではまずその理由のいくつかについて検討することから始めたい。

(i)布川孫市（静淵）が本名の布川孫市の他に、布川静淵、「山形東根、滝川三軒、得一子（居士）、城南、観潮菴」などの数多くのペンネームを用いたこと。布川は後年になって次のように所懐している。「私は年来種々の変名乃至雅号を使用して来た。本誌上でも、山形東根、滝川三軒、得一子（居士）、不染子、希声子、清蔭、城南、緑蔭、潮陽、菅藻生、観潮菴、その他、古きは無識庵を始め春野曙、夏野茂、晴嵐、春の人、夏の人、秋の人、又は時事子、小観子等々に至るまで新旧を合せると三十余を算する」として、「数多の雅号や変名を用ふるに至ったのは、雑誌編輯の関係より起ったのが多」く、編輯事務の関係上、紙面の都合上埋め草として多く書かなければならず、雅号、変名を多用し濫用してきたと文責を明らかにしている。[20]「山形東根」は布川の生国が山形県東根町（現在東根市）からきているし、「滝川三軒」は彼が住んでいた住所の滝野川区三軒町からきており、編集の必要にせまられて、興の趣くまま、風流を感じるままに、実に多くの雅号、変名を用いた。これらのことを知らないわれわれにとっては、同じ誌上や同時期の誌上にこれらのペンネームが同時に用いられた場合には、全く別々の人物であるかのように受取ってしまいがちである。六〇歳前後近くからの後年の筆名は「布川静淵」にほぼ統一されているが、こうした数多くのペンネームの使用が彼の足跡を辿り知ることの困難さをもたらしてきたひとつの理由であろう。

(ii)布川には無識庵主人著『相思恋愛之現象』（前編）（明治二四年）や布川静淵著『戦争の科学的研究』（昭和一六年）という著書があるものの、[21] 他にはまとまった社会学書や体系書がなかったこと。『想思恋愛之現象』について、布川は社会現象としての恋愛をあつかったもので「家族論」であり「一国社会の根本なる家族、其家族の基礎なる夫婦、其夫婦の苦楽を支配するに於いて最大の権力を有する恋愛の現象、豈に等閑に付して不可ならんや」とするものであったが、若い布川の情熱的な最初の著作は多くの人々の目につく書とはならなかったし、晩年の書である『戦争の科学的研究』も急をつげる戦時下にまとめられたものであった。しかし、生涯にわたる深い交友のなかで、布川は実に多くの友人や関係者の追悼論文や遺稿集、記念論集の編纂などにもかかわったことは注目される。『粛堂遺稿集』（乗竹孝太郎）・全四巻（明治四五―大正元年）、『養育院六〇年史』（昭和七年）、『田中太郎』（昭和八年）、『生江孝之古稀記念』（昭和一三年）、『岸清一伝』（昭和一四年）などである。[22] 布川の人柄でもあったのか、生涯にわたって、さまざまの人々と出合いつつ、深い交友関係を大切にして、むしろ裏方に徹して支えるといった人物であったように思われる。布川の社会学者として、あるいは著作活動を通じて世上に名を留めさせ続ける程の著作はなされなかったということなのであろうか。

(iii)布川が戦災の激しい第二次大戦末期の渦中に死去していること。わたし自身が一九〇〇年前後の「社会学会」や「社会学研究会」の動き、それらの活動の中心となった布川孫市という人物に興味をいだいて少しずつ調べ始めてはみたものの、当初は布川がその後どのような足跡をたどり、いつ亡くなられたのかということも全く分らなく調べようもなかった。しかし、ふとした偶然やご遺族の方にお会いしたりするという機会に恵まれて足跡を調べていく手懸りを少しずつ得られるようになった。布川が後年にかかわるようになった丁酉倫理会の雑誌『倫理講演集』（五〇一輯）（昭和一九年七月、四〇頁）に「静淵布川孫市氏の長逝」と題して短い訃報が載せてある。

或時は本会幹事として、又或時は編輯の一部を助けて本会発展のため尽力さるること少くなかった布川静淵氏は、昨年以来、

健康を害し、薬餌に親しまれていたが、今年春以後は衰弱甚だしく、つひに去る六月七日午後五時不帰の客となられた、享年七十五。氏は明治三年十一月一日、山形県北村山郡東根町に生れ、成立学舎、青山学院、慶応義塾、独逸学協会学校等に学び、社会学、殊に統計に造詣深かった。氏は若い頃より明治女学院[7]、上野高等女学校、青山学院、東京女子大学、東洋大学等に教鞭を執り、又内務省、農商務省、東京市役所にも奉職し、殊に大正五年、海外派遣官として南阿弗利加に赴き、更に欧州や露西亜の社会事情を調査して大正七年帰朝された。其の他、臨時産業調査局、財団法人協調会等の仕事もされたが、氏が最も力を注がれたのは雑誌編輯で、女学雑誌、日本宗教雑誌、社会雑誌、社会学雑誌、東京統計協会雑誌、東京経済雑誌等はその主なるもので、なほ大日本人名辞書の編纂にも従事された。氏は非常な読書家で、又愛書家であった。今日、氏の研究に俟つところ少なくないとき、氏を失ったことは学界のため痛惜に堪へない。[23]」

敗戦の色濃い、ますます戦火に追われる戦時下の渦中にあって逝去され、やがて終戦・戦後の激動・再建時期を迎えて、かつて活躍した社会学界の人物と同様に布川についてもその学史上の足跡を掘り起す作業はますます遠のいていったともいえる。

(iv)更に、先の訃報記事にも示唆されるように教壇に立った大学等にしろ、かかわった雑誌編集等にしろ布川自身の足跡の数多い変転もあったこと。このことも彼の近代日本社会学史上の足跡がいまだに不明のままにされてきたもうひとつの理由といえる。また彼の社会学界での最初の出発点となる一九〇〇年前後の「社会学会」「社会学研究会」との関連についても断片的な形でしか考察されてこなかったといわなければならない。

日本学術会議第一部『文科系文献目録・第一九（社会学編）』（一九六六年）のなかにひろえる布川孫市の著作文献はわずかに数点の論文にすぎない。[24] しかし、実際には彼は『女学雑誌』、『日本宗教』、『社会雑誌』、『社会』、『社会学雑誌』、『六合雑誌』、『統計集誌』、『東京経済雑誌』、『丁酉倫理会倫理講演集』、『社会学雑誌』（日本社会学会編）、『社会事業』、『猶太研究』（国際政経学会）などに厖大な数の論稿を書き残しているのである。「我国今日の社会学の盛況の基礎は、高木（正義）・布川（孫市）二氏に負う処が多いのである」、「若し幸いにして君の遺稿を整理するの機会あらば、恐

らく世人が驚くほどのものがあろうと思う」[25]という記述にもかかわらず、布川についての研究は充分なされてきていない。布川は「社会学的意識を身につけた時事的評論家」「社会学的ジャーナリスト」[26]としての特徴を確かに色濃くもつとしても、広く社会学者布川孫市の近代日本社会学史上の足跡についての研究を怠ってきたといわなければならない。

(b) 布川孫市の社会学とその変転

近代日本社会学の草創期において、いちはやく東京帝国大学が社会学講座を個別にすでに開設していたとしても、まだ同大学に社会学研究室は設置（明治三六年設置）されておらず、学問運動として広く当時の社会学界を組織化し『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』などを発行して学問活動を実践し方向づけるうえで、特に布川孫市、そして高木正義らの果した役割、貢献は積極的に評価されるべきであろう。

布川のおよそ五〇年に及ぶ学問活動の足跡（長い社会学的生涯における変転）をどのように考察すべきか。ここでは、次のような諸点に限定して考察していきたい。すなわち、(i)布川自らが社会心理的問題、社会学的研究へ関心を深めていく経緯、(ii)布川の社会学思想、社会学的関心の変転、(iii)布川の社会観察・社会調査（社会問題・現実問題、社会統計）への強い関心、(iv)布川と近代日本社会学の諸系譜、の四点である。

(i)布川自らが社会心理的問題、社会学的研究へ関心を深めていく経緯若い布川が「某神学校」（東京英和学校（青山学院）神学部）を中退して、社会心理的問題や社会学的研究に関心を寄せていくのは彼自らの宗教体験に根づいていたように思われる。「東根」の筆者による「余が宗教的信仰の一景（又名、幼時の迷信的経歴談）」[27]のなかで、彼の幼時からの成長の過程での宗教体験から当時の諸宗教の在り方に次第に疑問をいだき「宗教の現象は社会の心理的現象なり、社会学の智識にして今少しく我学界と教界とに進み居らんか、今日の如き区々たる論争は地を払うべしと信ずるな

り」として、「社会学的世界観」[28]に近づいていこうとする。布川は一八七〇（明治三）年十一月一日に山形県東根村（父久治、一姉一妹）に生れるが、十四歳の時に仙台に遊学（身元引受人は熱心な基督教徒、某塾に入塾）、「十五歳（明治十八年）の折、上京して半歳を経、何事も得る処なく、直ちに帰郷したり」とある（このときは慶應義塾に入社している）[29]。「帰郷後、中等教育の課程を自修したりき。当時余が村には基督教の伝道始まり居たり、始めは之を忌み嫌ひしも、漸次多少研究して入会することとなり、彼の洗礼を受けしは十六歳の時なりき」[30]。本多庸一のもとで弘前を中心にキリスト教伝道に従事していた古坂啓之助（一八五九―一九三五年）（日本美以教会系のメソジスト教会牧師）が山形美以教会（山形本町教会）の明治十七年に第三代牧師として赴任し、山形、天童、東根、寒河江、楯岡、白岩などにも伝道の足をのばし、すぐれた人物として尊敬を集めていたが、布川はその当時に洗礼を受けたものと思われる[31]。

十七歳の秋に再び上京し東京英和学校（青山学院）神学部に学ぶこととなるが、前記のように凡そ三年止まりで退学することになる。この「神学校に在りて哲学書を飜き始めしは余なりしか如し、之より信仰稍変じ、特に異端と目されき、スペンサーの著書を最も愛読し、彼れの社会学と、ボーエンの近世哲学、ハミルトンの形而上学、論理学、チンダルの文集、コントのポジチブポリシー等は、余が坐右に供えられたりしなり」と宗教的信仰の遍歴と懐疑の一端を書き記している。この青山学院時代に田中太郎、生江孝之、千葉鉱蔵、小此木信一郎らとの交友を得、生涯親交を深めていく。そして宗教への懐疑に苦悶していた布川を哲学、社会学、心理学などの学問の世界に導くもうひとつの契機がこの青山学院での元良勇次郎博士（一八五八―一九一二年）との出会いであったろうと思われる。

元良勇次郎は同志社出身であるが、東京英和学校の設立（明治十四年）にも尽力し、教授でもあったが、明治十六年に米国に留学しボストン大学で哲学を学び、次いで一八八八（明治二一）年ジョーンズ・ホプキンス大学の心理学科、哲学及び社会学科を卒業、Ph. Dの学位を得て同年七月に帰国し、再び青山学院に教鞭をとられたが、辞して間もなくして東京帝国大学文科大学の講師となり、明治二三年教授となり、日本において心理学、社会心理学の基礎を築い

た学者のひとりであった。布川の「社会学的世界観」の形成にあたってひとつの重要な学問的契機と支えを与えたのは元良勇次郎であったと思われる。東京英和学校の神学部を中退前後から以降の彼の生活を知る一端を次のような文章にしている。

一日訪問して余が社会学研究に従ふ旨を以てせしに、社会学には生物学、心理学の必要ありとて、種々の書冊を示して懇篤に教示せられた。其後余は学資に窮乏せる事情起り、先生を訪うて何等かの方法にて勉学を継続したき旨を以てせしに、早速承諾せられ、毎夜七時より十時まで、下宿より先生の宅に勤務することとなれり。数月の後は先生の宅に寄留し、爾来明治二五年秋まで四年に亘る永い間、学問上の外、生活上に於ても多大の恩恵を担った。[32]

布川の最初の著作である無識庵主人著『相思恋愛之現象（前編）』（明治二四年）もこの時期のものであり、後の『女学雑誌』や『日本宗教』とのかかわり、更に「社会学会」の発起や「社会学研究会」での活動も、多分に元良勇次郎を通じた人脈の広がり、巌本善治、田口卯吉、島田三郎、加藤弘之、高木正義などにしても、そうした広がりのなかから芽生えていったものと思われる。

布川は「宗教家は社会心理的問題に着目すべし」[33]として、「……信仰と云ひ、伝道と云うも其の対手とすべき社会の活勢如何を知らざるが為、今日の不振を来したるなれ、教家若し社会を知らんとせば、先づ社会の現象を研究せよ、特に社会心理的問題に注目を要す」[34]と述べている。特に「㈠人心の傾向」、「㈡民俗の気質」、「㈢時代の精神」に注目すべしという。社会問題、貧富の懸隔、土地問題、道徳問題等々というも、「活社会」を攻究し「充分に社会学的知識を有し、兼ねて諸般の実説を調査し始めて僅かに其の一斑を知らし得るものと心得て可なり」[35]と社会学の講究を本格的に開始していくことになる。

(ii)布川の社会学思想、社会学的関心の変転

布川がまとまった社会学書や体系書を書き残していないのは極めて残念なことであるが、彼のかかわった『日本宗

教』『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』『六合雑誌』『統計集誌』『丁酉倫理会倫理講演集』などの諸誌に掲載された論稿、数多くの断片的な社会学論をわれわれの視点から再構成する形で、布川の社会学思想、社会学的関心の変転を跡づけていきたい。彼の最初の活躍の舞台が、近代日本の社会学の草創期であっただけに体系だった社会学論を展開していくだけの用意や蓄積がまだ充分になかったということもあったのかもしれない。また布川自身の現実問題や時事的問題への強い関心や直接に彼をとりまく学問・生活環境もジャーナリスティクな論稿を多く書かせることになったのかもしれない。

（1）社会学論　布川は「社会学話(1)」「社会心理学の性質」「社会学と史学」「社会学の分類に就て」「社会学教授法」「社会学漫録」「社会進歩論」「社会研究の一端」「米国の社会学」「社会学の趨勢」「社会学の将来」「社会といふ概念及其適用」「農村社会学研究」などの数多くの社会学論を試みている。[36] 断片的で体系化されることはなかったが、社会学は「人間社会を科学的組織的に説明するを以て本分」[37]とするものであり、「社会学は社会的諸科学の基礎たる者にして一般の原理講究を為し、其対象は団体としての人類社会」[38]にあるとする。また別のところでも社会学は此社会的結合（心的連合）の由来因縁と其発達完成の法則を研究する」[39]ものであるとしている。布川の場合もこの当時の社会学観、社会科学観を多分に反映したものであり、政治学・歴史学・経済学・法律学・宗教学なども社会学の分科にあたるもので社会学は社会諸科学の基礎科学・総合科学としての立場に立つものであった。[40] しかし、「スペンサーの社会学を模範とすることの不可」として生物学を基礎とする社会学に対して、布川は社会学の対象は「人間の社会」であり、それは各個人間に生じたる知識、感情、意志等の結合し動反動したる結果より生じてくる種々の現象、社会心理的現象に基礎づけられた社会と個人の関係を研究するものであるとする。[41]「史学」は時代を限定して人間社会生活の発達を究めるのに比して、「社会学」はその歴史的性質を抽象して概括するものである。[42] 従って、「社会進歩の法則一斑」を明らかにすることも社会学の課題であった。「……世上、社会主義を鼓吹し、社会政策を議するもの、必

ずや先つ社会進歩の心理的研究に入り、国風と民族精神の発達とに顧みずんばあるべからず」[43]という考えを示していた。

「社会学教授法」（『社会』第八号、明治三二年一〇月、一二―二〇頁）に布川の社会学構想の断面が示されている。「如何なる順序によりて教授し若くは攻究すべき乎。私見を以てすれば左の如し」。その概略を示せば、

第一、社会学の発達（社会学史）

社会学史を講述し、又は攻究するに当り、第一に着眼すべきは斯学の性質如何の問題なり。

第二、序論

此中に含まるべきもの多々あり、先づ斯学と余他学科との関係、研究の方法、其問題及び範囲より総躰所謂序論と称する者なり。

第三、本論

唯だ社会団体という斯学の対象を最も明らかに説明するを以て本旨となすなり、之を為すに第一史的発達に尋ね、次に理論に訴え、次に実際に徴す、此三方面より釈義せざれば未だ其真を得たるものと称すべからず。

第四、当時切迫の問題

社会学講究の際、当時切迫せる問題を捉へて之を科学的に釈義することを力めざるべからず、即ち世人の視線を惹き国家に重要の関係を有する問題を究むるなり。

第五、実地探究（実験観察の要）

……今日の社会学に要する所は抽象組織せる部面より更に一転して活動する実物の上に着眼するに在り、……今日の要は一に人生社会の活学を振起するにあり、二に活勢を左右する意力を起すにあり、三に観察眼を新規にするにあり、世の所謂社会学者の社会眼は或は有機体として生物と比較し概括抽象して死物視し、為めに活勢力をも唯組織して之を観望し以て真を得たりと為すにあり、……人間万事の実際に就て世態人情の活智を得、活勢を見以て之を進歩せしめ之を活動して倦まさらしむるもの之を真個人生の学と云ひ活学と称す。

布川のいだいていた凡その社会学の構想を知ることができる。「社会学の将来」と題する論稿においても、「余輩の所見を一言すれば二十世紀の新哲学は社会的、国際的方面より改善せられ、情的意的の研究更らに一大進歩を為すの要あることなるが、之を成就せんには必ず先つ社会学の構成に俟たざるべからず」ところであり、それだけにその前途は多望であり、また「国際的方面之れ実に最近の発達なれば、国際社会学の未だ形態を為さざるは止むを得ざることなり」、「然るに従来の哲学に国民的特徴ありて国際的特徴なかりし如く、社会学も之を欠く。しかも此の国際社会の方面に至らざる者は到底不具の社会学たるを免れざるは弁を俟たざることなり」という構想をもっていた。[44]

(2) 社会学思想　布川の社会学論は、残念ながら、当時同世代の建部遯吾、次の世代の高田保馬、その他の社会学者のように少しでも体系化されることはなかった。それだけに、その社会学論を支えた彼の社会学思想を跡づける作業も容易ではない。ここではわたし自身がとらえた仮説的な展開として跡づけてみることにしたい。近代日本の多くの知識人の「思想」[45]遍歴にみるひとつのパターンを共有しているのかもしれないが、長い生涯においてある思想的立場を貫くという姿勢というよりも、その姿勢を変転し初期の思想的立場にむしろ相対立するかの姿勢を展開していく動きである。理念主義、理念的な現実主義から次第に状況的な現実主義、「現実への追随」[46]を余儀なくされていく変転である。

初期の布川においては、確かにすでに折衷論的な色彩もみられるが、「個人の発達を自由ならしめざる国家主義あらば、そは吾人の興せざる所、国家の立法行政のみに重きを置き個人の自由に力を用いざる彼の国家万能論は動もすれば官吏組織の社会たらしむる恐れあり」[47]とし、「……社会は個人の強固なるに従ひいて強く、個人は依立中にありて独立して始めて個人の価値あり、単に依立して分を尽さざるもの、之を人生の寄生物と云う」[48]といゝ、「世界の舞台……常に国民たると同時に、世界の一人たることを忘れざれ」[49]などに示されるように、多分に相対して自由主義的立場、個人主義的視点に立っていたといえる。

しかし、理念的な自由主義・個人主義的な視点から理念的な現実主義、折衷主義の立場を次第に色濃くしていくようにも思える。『社会』の第三巻十一号（明治三四年十一月）の時評滝川三軒「帝国主義と社会主義」などをみると、時代情勢の変化を感じざるを得ないし、「社会主義を唱道する者は社会主義を排せんとする如き傾向を批判して、滝川（布川）は「唯問うべき各其一を守りて他を排斥すべき性質のものなりや否や」を論じている。

> 要之、二主義は相反する性質の非れば決して、反対するの必要なし、必ずや二者の精神は兼併せらるべきものなり。勢力扶植、自国維持上より他国を征服する底の希望なき国民は、其結果縮少するを免れず、日本が大陸に地を領して他日露国と開戦するという如き覚悟は素より必要なり、（よし開かぬとしても）則ち帝国主義を持ち可し、又国内に於ては社会政策を施すべし、則ち社会主義の精神を取るべきなり、如今各文明国は此趨勢に捲き込まれたり。(50)

そして、第一次大戦を前後に布川の思想的立場は文明論的視点に急速に傾斜していったように思われる。日露戦争期から第一次大戦開戦期までの布川の論文は、彼が教鞭をとっていた明治女学校が廃校にされていく時期でもあり、『統計集誌』や『東京経済雑誌』などにいくつかの論稿があるだけで、比較的に数少ない時期でもあった。文明論的視点への傾斜は、特に官命によって(51)、一九一六（大正五）年九月より翌年一月までの南アフリカ視察、一九一七（大正六）年九月より翌年三月までの革命時のロシア視察という二度の海外視察によるところも大きいと思われる。「……亜細亜人排斥の目的を遂行する為、移民条例を発布し欧州白人以外の人種に対して鎖国主義を取りつつある次第、西洋人なるものの我儘勝手なる振舞に先づ一驚を喫したり(52)」という南アフリカの体験視察、「他国で政権争奪をやっているのに対して何等干渉すべきではありませぬ。自国の独立自由を妨害せられ、国家の安危に関する場合を除くの外は傍観して居るべきものと存じます(53)」というロシア視察談を残している。「東西文明の調査とは何ぞや」という布川の論稿では、「文明は生存競争し、優勝劣敗する」ものであり、「……優秀の文明が勝利を占め、夫れに感化することの遅速が文明の程度を分ち、而して文明の高き民族が国際的中心力となることは疑を容れぬ(54)」という文明論的視点を

明らかにしている。しかし、当時の人種差別、移民排斥、労働問題・農村社会問題・失業問題・生活問題、社会運動などの世界情勢、社会情勢に照らして、「現下の日本は何れの方面より見るも最早行詰りつつある」、「……国内の貧弱の人口過剰して、同胞互に排斥する如き現状は不吉の極である。此競争心を以て海外発展に向けなければならぬ」という危機意識を強めていく。(55)

『戦争の科学的研究』(昭和一六年)では、当時の戦時体制下という状況的現実主義、現実への追随の色彩を一層強めていく。「……今次戦争の性格、影響、推移、傾向等を真率に直覚し、聖戦の生命を血肉化し、――驀地(ばくち)に之を会得するの必要を痛感している。即ち形式の社会学でなく、実験の社会学を欲する」(同書、「序」)として、社会現象としての戦争を論じつつも「東亜の新秩序建設」のための戦争論を試みた。「所謂、世界国家、国際主義、世界主義、自由個人主義、民主主義及び社会主義等の思想は、要するに猶太教と基督教とに基因する所多き」(56)として、皇国主義の立場から文明的対決の姿勢を強め、猶太思想の研究に斜いていった。(57)晩年のこの立場は布川の初期の思想的な視点とはむしろ相対立していく遍歴といえる。多くの人々をもとり込んでいった歴史状況の推移であったとしても、布川の現実の実際問題への強い関心と「追随」に加えて、こうした思想上の激しい変転は社会学上の理論的体系化等をも難しくしていったと考えられる。

(3) 社会学的関心と「実地探究」・「実験観察」 布川の主たる発起による「社会学会」の機関雑誌『社会雑誌』は、「『社会雑誌』は貧富の懸隔、地主と小作人との関係、資本家と労働者との衝突等より来る諸種の問題に就て討議し、其弊毒を除去せんことを期す」「『社会雑誌』は孤児院救助院感化院其他一切の慈善事業の現況、組織、沿革等を叙し、之を淘汰し、之を助長せしむることを期す、犯罪、監獄問題の如き特に力むる所とす」「『社会雑誌』は人情風俗気風等の社会心理的現象を研究し、国民精神の所在を明かにし、時代の精神に向って正確の論評を試みんとす」(58)ことなどをとりあつかう具体的な対象関心をもっていた。しかし、布川個人の主たる社会学的関心は、かなり多領域に及ぶも

のであったとしても、最初の著作『相思恋愛之現象（前編）』などにみるように家族論（恋愛、情死、離婚など）[59]、女性論[60]、下層社会論[61]、足尾鉱毒問題[62]、広告論[63]、労働・失業問題[64]、生活問題[65]、文明論[66]などに関する論稿が多かったといえる。布川の社会学的関心の大きな推移という観点からすれば、比較的身近な生活問題、社会問題への関心から、P・A・ソローキンなどの社会学研究をも含めてより巨視的な文明論的関心へと推移していったと考えられる。

布川には「実地探究」「実験観察」「社会観察」による方法の重視という姿勢は当初よりみられるものであった。「読書に偏して始めより製造人の如く著作せん為めに研究する如き風は好ましからず」、「希くは実験観察の方法を盛んならしめよ」「……足元の事柄より着々実験観察し、実形的観念、実際上の智識を朽ちざる脳中に蓄ふべし」[67]という姿勢であった。「社会学の方法一にして足らず、社会観察の種目亦枚挙するに遑あらずと雖も、第一に吾人の着手すべきは簡単より複雑に進めて、漸次社会の事実を視察し、之が歴史的関係を尋ね、是が現況を詳知するにあり」「就中最初の事業は各自の居住する辺涯より漸次探究することなり」[68]とも記していた。このような視点を形成していく背景には、彼自らの当時の歴史的社会的状況における諸体験、元良勇次郎の心理学の影響[69]、スモールとヴィンセント[70]などからの吸収ということも影響していたものと思われる。

(iii)布川の社会観察・社会調査（社会問題・現実問題、社会統計）への強い関心　布川の「実地探究」「実験観察」「社会観察」の実際の試みは、足尾銅山鉱毒地調査や細民統計調査などに示されている。『社会雑誌』の創刊号（明治三十年四月）が主筆の布川の足尾鉱毒被害地視察のために予定の発行日が遅れた経緯の記事については既に触れたが、同創刊号の冒頭にあたる「時論」でまず「足尾鉱毒問題」をとりあげている。

政府の怠慢と鉱業主の不注意より、人為的に今日の害毒を来したる者なれば、先づ事物の軽重を察すべきなり、足尾銅山の休業は国家の経済に幾何の影響を与ふるぞ、関東の沃野を害し、数万の人民をして衣食に窮せしむるのみならず、一銅山の為めに多数の土地を荒地たらしむる如き、到底利害の比較すべきものに非ず、経済と云ひ輸出といふ、何の意義ぞ。一富豪の為めに数

万の人民土地を犠牲とするとは、吾人の断じて排斥する所也。[71]

『田中正造全集』第十五巻には一九〇一（明治三四）年四月二九日付の田中正造から布川孫市に宛てた封書が残されている。[72]

昨年の夏も本年の春も鉱毒調査之ために花を見るも涼さを取るをもなく御尽し被下候御辛労之事ハ、巌本様より時々拝承仕候処、追々東京表ニ同情者も増加いたし難有奉存候。皆巌本様、貴君様等の御蔭と奉存候。然るに小生近来脳病ニ而何等もまとまり不申困り入り申候。余り久敷相成候ニ付御伺旁已往近事の感少々申上置候。此上何分御救へ被下度候。大勢の公判ハ来月下旬に開け可申候。小生のも其頃ニ可有之候。

草々

四月二十七日　　正造

布川様

これは布川がしば〳〵足尾鉱毒地視察・調査に出掛けていた様子を示す資料でもある。この封書の時は「鉱毒調査有志会」（明治三三年七月結成）の調査メンバーとして出掛けていたものと思われる。布川と岡本誠之が「出張調査」して、布川は「足尾銅山鉱毒地調査報告」[73]をまとめている。実地調査は調査地、栃木県安蘇郡界村大字高山地方（高山村）（現在の佐野市高山町）であり、明治三四年七月、九月、十月の三回、十余日の調査であり、報告の「材料」は「主として同村役場の原簿に依り親しく手を下して統計を造り、更に他に再調せしめて之を検査したる者と、医師其他の各種の人士に就て聞き質したる者と、併せて戸別に訪問して実視したる者」[74]という三種の調査を活用したものであった。調査内容は、人口、衛生状態、土地異動、農業、徴兵事項、普通教育、財政、経済事情、生活概況など広範に及ぶものであった。統計的な調査だけでなく、加えて地元の医師との「対話」、農婦、屋根屋妻よりの聴取り、質商の「質物調」など極めて興味深い調査を試みていたことは注目される。

また、現実の社会問題や社会観察に関連して、「近時の社会的著作」に触れ「我学界には社会学、社会問題等に関

する文書甚た少なかりしが、近頃に至り俄かに続出せり。蓋し気運のしからしむる所、流行とのみ断すべからざる者あり。横山源之助氏の「日本の下層社会」豊原又男氏の「資本と労働」桑田熊三氏の「欧州労働社会の大勢」福井準造氏の「近世社会主義」村井知至氏の「社会主義」、外に統計的に見たるものには呉文聡氏の「統計実話」モルフ氏の「社会道徳に関する統計あり……」[75]として、横山源之助や呉文聡の著作を挙げていたことも注目されてよい。

更に布川は明治末期から大正期にかけての東京市、大阪市での一連の細民統計調査に関与している。近代国家としての形成過程において国家・行政府の統治行政上・財政上の政策的意図から貧困層・細民層の救済事業の一貫としての細民調査は、一八九八（明治三一）年の内務省の細民状況調査、一九〇二（明治三五）年の宮城県の「宮城県貧民調査」、一九〇七（明治四〇）年の警視庁「貧民状況調」などとしてすでに開始されていたが、一九一〇（明治四四）年に東京市内の一部を対象に内務省地方局による「第一回細民統計調査」が実施されることによって本格化していった。[76]

細民調査、内務省にては東京市に於ける細民の調査をなさんとし戸別調査の外貸長家、雇人口入業、金融機関及び職工家庭等に別ちて詳細の調査をなすこととなり、本年度は先づ市内の一部分を精密に調査せんとして目下着手中の由、尚之が直接担任者は内務省に於ては留岡幸助、生江孝之、相田良雄、布川孫市の四氏にて、其外東京市養育院幹事安達憲忠、東京府立職工学校長秋保安治、統計局技師二階堂保則、出獄人保護事業主管原胤昭、丸山、山岡両警視、下谷区金杉、入谷両警察署長、万年町小学校長阪本龍之輔、及田中太郎の諸氏に調査を嘱託せりと云ふ。[77]

布川孫市は、この当時は、教鞭をとっていた明治女学校の廃校（明治四二年）によって、内務省地方局嘱託としてこの第一回細民統計調査にかかわり、その後の東京市、大阪市での第二回細民統計調査にも関係して、布川は内務省地方局（編纂）『都市改良参考資料』（大正四年三月）を執筆し、更に大正十年の内務省社会局の細民統計調査にはその施行にあたって主査として参画している。[78]

情死統計、離婚統計、工場・労働統計、失業統計、救済事業統計、人口動態統計、社会道徳統計、また「総選挙の

分量的考察」[79]などの社会統計や統計分析による論稿も多い。「人間は生物であれば必ず生物の法則に従ふべく、自然を愛し自然に随ひ自然を利用し自然と親しまざる如き都市は、必ず破滅するが文明史上の原則である」という関東大震災の直後の論稿「震災の社会的観察」[80]も興味深い。しかし、総じて「細民統計調査」をも含めてこれらの社会統計的分析は、布川の初期の自らの「実地探究」「実験観察」「社会観察」からは相対して離れていき、既存統計の統計的分析に著しく傾斜していったともいえる。「実地」での自らの社会観察を重視しそれを持続しようとした横山源之助の視座とも異なる[81]。文明論的視点、猶太研究へと辿りつく布川の社会学思想の変転とこのような社会観察の姿勢とは相互に結びついていたといえるかもしれない。

(iv)布川と近代日本社会学の譜系譜　近代日本社会学史研究において今後とも深めていかなければならない諸点も多い。欧米の社会学の紹介、導入やその欧米社会学の展開という側面からの近代日本社会学の展開という視点に立った研究が従来多かったが、他方で我が国の在来・土着の社会思想という側面からの近代日本社会学の形成という歴史的な視点、アジア諸国での社会学の展開という側面からの比較史的考察、更に近代日本社会学そのもののさまざまな足跡・系譜の再検討、といった課題が果しなくまだまだ残されている。

近代日本社会学そのもののさまざまな足跡や系譜の再検討という視点に立って、本稿で試みた学問運動・活動の組織化、制度化という動きに照せば、近代日本社会学の草創期における布川孫市、高木正義、加藤弘之らによる「社会学会」「社会学研究会」の組織化と活動を学史研究のうえで正確に位置づけておく作業は重要であろう。この時期を相前後して試みられた東京帝大の「社会学研究室」の創設や建部遯吾による社会学の系譜にのみ焦点があてられ過ぎてきたともいえる。

これとの関連で、近代日本社会学の展開を跡づけると、総合社会学としての社会有機体説から個別科学的な心理学的社会学へというある種の段階論的な展開の捉え方は必ずしも適切ではないように思える。布川や高木らの社会学の

試みは確かに体系化されることはなかったとはいえ、多分に総合社会学的な心理学的社会学の展開であり、この当時の社会学という学問運動の状況としては二つのパースペクティブ、他のさまざまのパースペクティブの重層的な競合状況として位置づけられるのではないだろうか。一つの特定の支配的なパースペクティブのみを強調するような形での学史展開を跡づけることは、学史研究を適切に深めることにはならないと考える。

また、確かに個別科学としての自立化の歩みとして社会学を跡づけることが正当であるとしても、近代日本社会学の展開を学問運動・活動という点で考えると、例えば哲学、歴史学、社会思想などの他の学問分野との相互の関係や交流を全く断ち切って個別科学としての自立化を図るのではなく、むしろそれらとの相互の関係や交流のなかで影響を受けながら学問的展開が図られるのが常である。近代日本社会学史研究においてはそれらの関係枠を特定の社会科学的・社会思想史的観点に限定して試みられてきた感がある。従って、布川孫市のように明治末期から社会学界の表舞台から離れていく人々の社会学的生涯・足跡はとらえることはできなくなってしまうのである。布川は大正期以降の活躍の舞台を「丁酉倫理会」という倫理学界・哲学界を軸に数多くの論稿を書き社会学的活動を持続していった。戸田貞三も主著『家族構成』を刊行した昭和十二年に「丁酉倫理会」の新会員として加入していたし、会員として浮田和民、遠藤隆吉、三宅雄二郎、杉森孝次郎、井上哲次郎、安倍能成などさまざまな人々が会員として名を連ねていたのである。[82] 近代日本社会学の展開も裾野をより広くして再検討してみる必要があるのではないだろうか。

更に、布川やその他の人々による一九〇〇年前後に試みられていく「実地探究」「実験観察」「社会観察」とその変容をみると、第二次世界大戦終戦前に「……現実的な日本社会の地盤に根を下した実証的研究においては幾多の先学の偉業を数え得るとはいうものの、一般には極めて貧困であったのである」[83]という指摘は一面ではあたっているとしても、近代日本におけるその貧困化の過程やさまざまの社会調査や社会観察の試みの足跡を検討しなくてはならないであろう。近代日本国家・社会の歩みと、そこにおける人々、社会科学者の現実把握、現実観察・社会観察の試みと

その変転を厳として見据え直す作業が必要なのである。

四、近代日本社会学史の批判的継承

社会学研究においても、広く「現実」のあり方と共に、国際的、世界的な研究動向に照らして学問活動を試みていく必要性が一段と増してきている。同時に、そうした試みは、歴史的社会的事象をとりあつかうかぎり、足元に繰り広げられてきた「現実」と社会学研究にかかわるさまざまの足跡についての適切な認識と継承、かつ批判的継承を踏まえてなされていくことが望ましい。両者の相互媒介や相互交流を欠いて両者が分極化していく学問活動は相互に個別に閉していくことになり易い。われわれ一個の学問力、想像力や創造力ももとよりかぎられたものでしかないし、われわれがかかわるそれぞれの学問が辿った足跡や苦闘、遺産を批判的に継承せずに学史研究を軽ろんずることは大きな損失といわなければならない。近代日本社会学の歩み、戦後日本社会学の歩みについても、再掘し再検討を試みていく課題がいまなお存しているといえる。

本稿では、近代日本社会学史研究において、これまで殆んど研究が試みられ顧みられることのなかった布川孫市（静淵）の学問活動を中心にして、(1)一九〇〇年前後の幅広い学問運動・活動としての「社会学会」「社会学研究会」にみる社会学界の動きについての再考察、更に(2)学問活動を人間的営為として社会学的生涯という視点からの考察、(3)布川にみる彼個人の社会学的関心や社会学的世界の形成、社会学思想の変転、社会問題や「実地探究」「社会観察」への関心、ジャーナリスト的関心などの特徴、(4)近代日本社会学史上の系譜をめぐる再検討などの諸点をとりあげることができた。布川の学問活動の足跡をまずは発掘するという試みからして、多分に書誌（学）的な論稿のきらいもないではないが、今後の学史研究のためのひとつの模索でもある。

付記　本研究は平成四年度慶應義塾学事振資金の助成を受けてまとめられたものの一部であることを記して謝意を表したい。研究を進めるうえで、偶然の機会に恵まれて布川孫市氏の孫娘にあたられる布川清子さんより故人についての貴重なお話や資料等に接することができたことに深謝申しあげたい。また本稿は一九九二年六月十三・十四日の日本社会学史学会（於専修大学）のシンポジウム「日本社会学における戦前と戦後の接点」での筆者の報告、一九九二年十月三十一日、十一月一日の日本社会学会（於九州大学）での報告要旨をもとに今回新たに論稿としたものである。

(1)　従来の社会学史研究のなかでも、河村望『日本社会学史研究（上・下）』人間の科学社、一九七五年、秋元律郎『日本社会学史―形成過程と思想構造―』早稲田大学出版部、一九七九年、斎藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版、一九七六年、斎藤正二『社会学史講義』新評論、一九七七年、高橋徹『近代日本の社会意識』新曜社、一九八七年、新明正道『社会学史概説』岩波全書、（一九五四年）一九七七年、横山寧夫『増補　社会学史概説』慶應通信、一九八一年、横山『社会学理論と社会思想』慶應通信、一九八四年、新睦人・他『社会学の歩み（Ⅰ・Ⅱ）』有斐閣新書、一九七九年、一九八四年、など。

(2)　大道安次郎『日本社会学の形成――九人の開拓者たち――』ミネルヴァ書房、一九六八年。大道は、帆足万里、西周、加藤弘之、外山正一、建部遯吾、遠藤隆吉、米田庄太郎、戸田貞三、高田保馬という九人の開拓者をとりあげている。

(3)　布川孫市らが加わった「社会学会」の『社会雑誌』、「社会学研究会」の『社会』『社会学雑誌』が一九九一年十二月に復刻刊行されるに際して、小生はその「解題」を書いたが、その時点では布川についても極めて限られたことしかよくわからなかったのである。拙稿「解題」『明治期社会学関係資料』（全一〇巻、龍渓書舎、一九九一年）のうち第一巻、特に二六頁を参照のこと。

(4)　拙稿「解題」『明治期社会学関係資料』（全一〇巻）、前出。

(5)　拙稿「日本社会学会の設立とその後の経緯」『法学研究』第六一巻五号、一九八八年五月。

(6)　川合編『近代日本社会調査史（Ⅱ）』（慶應通信、一九九一年）の「付録、『日本社会学院年報』、『社会学研究』の「雑誌記事目録」を参照のこと。

(7)　『社会雑誌』第一巻一号、明治三〇年四月、四八頁。

(8)　『日本宗教』第七号、明治三〇年一月、一頁。

(9)　『社会雑誌』第一巻一号、前出、六二頁。

(10)　拙稿「解題」（『明治期社会学関係資料』）前出、一―六頁。

(11) 「社会学研究会発会式」の記事、『社会』第一号、明治三二年一月、八二―八三頁。
(12) この当時の加藤弘之（一八三六―一九一六）は、明治十四年より東京大学総理、明治十五年『人権新説』を出版することで以前の著作を絶版にして、つづいて明治二六年三月まで東京帝国大学総長であった。明治二三年九月より貴族院議員に勅選されていた。
(13) 『社会』第一号、前出、八二頁。
(14) 同、九〇頁。
(15) 『社会』第一〇号、明治三三年一月、の「口絵」。この写真は後に日本社会学会『社会学雑誌』（第五三号、昭和三年九月）に再録されて、下出隼吉（一八九七―一九三一）の名前でこのときの総会やその写真の人名についての説明が付されている。これは、この『社会学雑誌』第五三号に布川静淵の「明治三十年前後の社会学界、社会運動についての追懐談」が載せてあるところからして、下出が布川孫市から写真の人名を聞き出してそれらを参考にして付したものと思われる。
(16) 『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』昭和二九年、九―一〇頁。
(17) 『実業家人名辞典』東京実業通信社、明治四四年、「タ之部」四七頁。布川の前出「追懐談」九九頁など。
(18) 『社会』第一〇号、前出、人名の説明については日本社会学会編『社会学雑誌』第五三号、昭和三年九月、「口絵」を参照。
(19) 青山なお『明治女学校の研究』慶應通信、昭和五七年四月、八三八―九頁。また、布川の明治女学校への新任については同書の「年表」の明治二九年のところに「この年、湯谷磋一郎、布川孫市、戸川安宅、鈴木たけ、土岐磯代新任」とある（八二一頁）。
(20) 布川静淵「ペンネームに就て」『（丁酉倫理会）倫理講演集』第三一七輯、昭和四年三月、一一一―一一三頁。これは布川が六〇歳の還暦を迎えた年の記事である。
(21) 無識庵主人著『相思恋愛之現象（前篇）』金港堂本店、明治二四年四月、布川静淵『戦争の科学的研究』大都書房、昭和一六年九月。布川、小此木秀野（信一郎）共著『俳諧史伝』（女学雑誌社、明治二九年）は未見。
(22) その他にも布川は「故博士の私宅の生活（元良先生を憶ふ）」故元良博士追悼学術講演会編『元良博士と現代の心理学』弘道館、大正二年、所収、「佐久間君を憶ふ」『佐久間貞一伝』明治三七年、所収、なども書いている。
(23) 『倫理講演集』第五〇一輯、昭和一九年七月、四〇頁。布川の孫娘にあたられる布川清子さんのお話によると、布川は大変な蔵書家であったが昭和二〇年四月十三日の空襲で灰燼に帰してしまったという。布川清子「祖父と私」巌本記念会『巌本通信』第一〇〇号記念特集・資料、昭和六二年九月、所収、一七―一八頁。

(24) この『文科系文献目録（社会学編）』にみる布川の著作文献は、「社会学の分類」『社会』一―八、明治三三年、「社会学の趨勢」『社会』三―四、明治三四年、「社会学の将来」『社会学雑誌』四―一、明治三五年、得一居士「社会研究一斑」『社会学雑誌』四―二、明治三五年、「三十年前後の社会学界社会運動界に関する追懐談」『社会学雑誌』五三号、昭和三年、のみである。

(25) 小豆沢英男「布川孫市君の追懐」丁酉倫理講演会『倫理講演集』第五〇一輯、昭和一九年七月、四五―四七頁。

(26) 高橋徹『近代日本の社会意識』、前出、三四八頁。

(27) 『日本宗教』第二巻三号、明治二九年九月。

(28) 同、一三六頁。

(29) 慶應義塾『入社帳』（明治十八年）、第三巻、一七四頁。

(30) 東根「余が宗教的信仰の一景」『日本宗教』第二巻三号、前出、一三二頁。

(31) 同、一三三頁。古坂啓之助については『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年、五一九頁、『山形本町教会創立百周年記念誌―一八八二―一九八二年』一九八四年、一―八頁。

(32) 布川孫市「故博士の私宅の生活（元良先生を憶ふ）」、前出、三九九―四〇〇頁。元良勇次郎の著作には『心理学』金港堂、明治二三年、『心理学十回講義』富山房、明治三〇年、『現今将来倫理及宗教』勉強堂、明治三三年、『倫理学』富山房、明治二六年、『論文集』弘道館、明治四二年、『心理学概論』丁未出版社・東京宝文館、大正四年、など。『元良先生追慕集』三田市郷土先哲顕彰会、昭和四五年、佐原六郎「黎明期の日本社会心理学（元良勇次郎と社会心理学の萌芽）」『社会学と社会心理学』所収、慶應通信、昭和六二年、参照。

(33) 『日本宗教』第一巻九号、明治二九年三月、五四七―五五二頁。

(34) 同、五四九頁。

(35) 同、五四七頁。

(36) 「社会学話(1)」『社会雑誌』第七号、明治三〇年十一月、「社会心理学の性質」『社会雑誌』第八号、明治三〇年十二月、「社会学と史学(1)」『社会雑誌』第十三号、明治三一年六月、「社会学の分類に就て」『社会』第一巻七号、明治三二年九月、「社会学教授法」『社会』第一巻八号、明治三二年十月、「社会学漫録」『社会』第二巻十二号、明治三三年三月、「社会進歩論」『社会』第二巻十二号、明治三三年三月、「社会研究の一端」『社会』第二巻十三号、明治三四年四月、「米国の社会学」『社会』第二巻十六号、明治三三年七月、「社会学の趨勢」『社会』第三巻四号、明治三四年四月、「社会学の将来」『社会学雑誌』第四巻一号、明治三五年二月、「社会といふ概念及び其適用」『倫理講演集』第二七二輯、大正一四年六月、「農村社会学研究」『倫理

講演集』第三二五輯、昭和四年十一月。

(37) 「社会学と史学(1)」、前出、一二頁。

(38) 「社会学の分類法に就て」前出、二六頁。

(39) 「社会といふ概念及び其適用」前出、七八頁。

(40) 豊崎善之介「社会学と他科学との関係」『六合雑誌』二二六号、明治三二年十月。

(41) 「社会心理学の性質」前出、二四—二七頁。

(42) 「社会学と史学(2)」『社会雑誌』第一四号、明治三一年七月、一一—一六頁。

(43) 「社会進歩論（特に日本今日の社会進歩の程度に就て）」前出、六一頁。

(44) 「社会学の将来」前出、四八—五五頁。

(45) 身につけた（身にまとった）「思想」と生きづいた、根づいた「思想」とを区別することができるかもしれない。森有正『経験と思想』岩波書店、一九七七年。

(46) 秋元律郎『日本社会学史—形成過程と思想構造』前出、二九四頁。

(47) 山形東根「国家主義と個人主義及び世界主義の論争と宗教」『日本宗教』第二巻十一号、明治三〇年五月、五五六頁。

(48) 観潮菴「人生依立論」『日本宗教』第二巻十号、明治三〇年四月、五一三頁。

(49) 東根「学歩小景」『日本宗教』第二巻二号、明治二九年八月、七二頁。

(50) 滝川三軒「帝国主義と社会主義」『社会』第三巻十一号、明治三四年十一月、三六—七頁。

(51) 農商務省の嘱託として官命で南アフリカ、そしてロシアの海外視察に出かけたものと思われる。

(52) 「南阿弗利加視察談」『統計集誌』第四三四号、大正六年四月、二頁。

(53) 「動乱中の露国視察談」『統計集誌』第四四六号、大正七年四月、六頁。

(54) 布川静淵「東西文明の調和とは何ぞや」『倫理講演集』第二三四輯、大正十一年二月、四七—五七頁。

(55) 布川静淵「世界に於ける日本の地位と其危機」『倫理講演集』第二五八輯、大正十三年四月、七四—九二頁。

(56) 布川『戦争の科学的研究』前出、二七一頁。

(57) 『猶太研究』（国際政経学会編）には、布川は「猶太民族性格の特徴」『猶太研究』第一巻一号、昭和十六年五月、「猶太思想の特徴と其影響」（上・下）、二—一、二、昭和十七年一月、二月、「猶太問題の特徴」（上・中・下）、三—七・八・九、昭和十八年七月、八月、九月、「猶太思想の研究序説」三—十一、昭和十八年十一月、「猶太民族の社会思想」（一・二）、三—十

二、四―二、昭和十八年十二月、昭和十九年三月、など他に一六編ほどの論稿を執筆している。

(58) 「発刊の要領」『社会雑誌』第一巻一号、明治三〇年四月、一頁。

(59) 「情死統計」『社会雑誌』三年、明治三〇年六月、「離婚問題」『社会学雑誌』第五巻三号、明治三六年四月、「情死の研究及び其倫理的観察」（上・中・下）『倫理講演集』第一四七・一五〇・一五二輯、大正三年十一月、大正四年二月、四月、「遺書に現われたる情死者の心理」『倫理講演集』第二五二輯、大正一二年八月、など。

(60) 「婦人社会の研究」『社会雑誌』第六号、明治三〇年一〇月、「婦人労働の問題」『社会学雑誌』第四巻五号、明治三五年五月、「女性の進出による社会的変化」『倫理講演集』第三九五輯、昭和一〇年九月、など。

(61) 「東京下層の一瞥」『日本宗教』第二巻九号、明治三〇年三月、「貧民問題一斑」『社会雑誌』十三号、明治三一年六月、など。

(62) 「足尾鉱毒問題」『社会雑誌』第一号、明治三〇年四月、「鉱毒問題」『社会』第二巻十三号、明治三三年四月、「足尾銅山鉱毒地調査報告」『社会』第三巻十一号、明治三四年十一月、「鉱毒被害の鑑定」『社会』第三巻十二号、明治三四年十二月、「足尾銅山除害工事の効果奈何」『社会学雑誌』第四巻十一号、明治三五年十一月、など。

(63) 「売薬広告と民俗」『六合雑誌』第二二一号、明治三二年五月、「現代の広告哲学」『倫理講演集』第二九五輯、昭和二年五月、など。

(64) 「人力車及び車夫」『社会雑誌』第二号、明治三〇年五月、「工女問題」『社会雑誌』第十一号、明治三一年四月、「東京の工場及職工」『社会』第三巻四号、明治三四年四月、「日本の工場及職工」『社会学雑誌』第四巻十一号、明治三五年十一月、「現代日本に於ける労働問題」『倫理講演集』第二〇三輯、大正八年七月、「階級闘争問題」『倫理講演集』第二五七輯、大正十三年三月、「現代日本の失業問題」日本社会学会『社会学雑誌』第十号、大正十四年、など。

(65) 「最高生活費問題」『東京経済雑誌』八四巻二一〇〇号、大正十一年、「文化生活の標準」『倫理講演集』第二三八輯、大正十一年六月「生活問題を中心に」『倫理講演集』第二四二輯、大正十一年十月、など。

(66) 「現代日本文明の価値と其将来」『倫理講演集』第二〇二輯、大正八年六月、「世界に於ける日本の地位と其危機」『倫理講演集』第二五八輯、大正十三年四月、「現代文明の傾向と批判」『倫理講演集』第三〇〇輯、昭和二年十月、など。

(67) 東根「学界小景」前出、七二頁。

(68) 布川「社会観察の種目」『社会雑誌』第五号、明治三〇年八月、二三頁。この指摘は、柳田国男「郷土研究の要件」『青年と学問』岩波文庫、二〇三―五頁とも重なるところが多い。

(69) 布川「元良先生を憶ふ」『倫理講演集』第一二六輯、大正二年二月、のなかで元良の学風に触れて「知識は凡そ経験より

来たるの一語を最も重しとされた。一言すれば実験科学者の態度で終始されたと思ふ」（九六頁）と述べている。

(70) 「社会観察の種目」（前出）のなかで、A. W. Small and G. E. Vincent, An Introduction to the Study of Sociology, 1894. に触れて参考にしている。

(71) 「足尾鉱毒問題」前出、七頁。

(72) 『田中正造全集』第十五巻、岩波書店、一九七八年、二六二頁。

(73) 「足尾銅山鉱毒地調査報告」前出、七―二三頁。

(74) この調査報告を布川は「以上は鉱毒被害地の一部たる高山地方の調査なり、之を他の無害地と対比すれば最も明白に其惨情を示すに足るべしと雖も、単に此に挙くる所によるも其の一斑を察することを得べし。抑も上記の事情は悉く其地方の衰退、疲弊、困窮、退歩等の傾向を示す者にして、他無害地方の状況は一般に之に反対の傾向を示すは尤も観易き所なり。若し万一上の如き事情の一般地方に現出せんか、之れ明かに亡国の状態にして国家一日も立つべからざる所なり」と結んでいる。

(75) 「近時の社会的著作」『社会』第六号、明治三二年八月、九〇頁。

(76) 一番ヶ瀬康子「解説　第一巻『貧困（大正期）』について」社会福祉調査研究会編『戦前日本社会事業調査資料集成、第一巻（貧困1・大正期）』勁草書房、一九八六年、一―十一頁。

(77) 中央慈善協会『慈善』三編一号、八一頁。

(78) 内務省社会局『大正十年施行　細民調査統計表』大正十一年六月。布川の編纂による内務省社会局『細民生計状態調査（大正十二年）』がある。

(79) 「総選挙の分量的考察」『倫理講演集』第三三〇輯、昭和五年四月。

(80) 「震災の社会的観察」『倫理講演集』第二五四輯、大正十二年十一月。

(81) 拙稿「横山源之助の『日本之下層社会』と『南米ブラジル案内』」川合編『近代日本社会調査史（Ⅰ）』所収、慶應通信、一九八九年。布川の「社会調査の発展と其の文献」（上・下）『社会事情』第十八巻十二号、昭和一〇年、も布川の貴重な著作文献といえる。

(82) 『倫理講演集』第四二二輯、昭和十二年十二月、一二七頁。第五〇一輯、昭和十九年七月の巻末の「丁酉倫理会々員名簿」などを参照。なお『倫理講演集』第一輯は明治三三年五月に発行されている。

(83) 福武直「我国社会学の再建のために―過去への反省と将来への展望―」（一九四七年）『社会学の現代的課題』所収、日本評論社、一九四八年、二二九頁、二三五頁。